

国内で外国語会話を習得するためのポイント

国際教養学部アジア学科非常勤講師 李 景芳

まちを歩いているだけでも、外国人が話す外国語が普通に耳に入るようになってきました。さらに2020年の東京オリンピック開催に向け、日本にやってくる外国人はまだまだ増えるといわれています。文化的にも経済的にも外国とのつながりが拡大し、外国語の必要性も高くなっています。しかし外国語が話せるようになりたいと考える学生が多い一方で、外国語を聴くこと、話すことが難しいという声もよく耳にします。たしかに中国人が中国で日本語を勉強する、あるいは日本人が日本で中国語を勉強するといった、母国にしながら外国語を学ぶことは、ことばの環境がないだけに困難なことが少なくありません。どうすれば母国で外国語をマスターできるか、私の経験からいくつかのポイントを挙げてみました。

まずその言語の「発音」を身につける。

その第一歩はこれから勉強する外国語特有の発音を繰り返し聴き、それを真似て大きな声で発音することで、その言語の「音」をつかむことです。これは外国語を学ぶ大切な出発点です。最初はなかなか慣れることが難しく、また単調で無味乾燥な練習ですが、これを越えなければ外国語は上達しません。中国では、聴く→話す→読む→書く→訳す、という順番で外国語を学習します。つまりそれくらい耳と口の訓練は、ことばを学ぶ上で大切な基礎と考えられています。

私が中国の外大で初めて日本語を学んだ時のカリキュラムでは、最初の「あいうえお…」の五十音図の発音だけで、一ヶ月も練習が続きました。朝から晩まで、耳から聴いてはそれを真似して発音する、「あいうえお」の文字（ひらがな、カタカナ、ローマ字）の書き方を覚える。ただそれだけの練習が毎日続きました。当時私たちは先生から「寝言に“あいうえお…”が出て来るまで頑張りなさい！」とよく言われました。「あいうえお」が暗誦して大声で言えるようになれば、次は「あかさたな…」それができれば今度は後ろから「おえういあ…」、さらに「しゃしゅしょ…」というように徹底して日本語を聴く、大声で発音する、文字を書くという練習を繰り返しました。それができれば、

「あひるのあかちゃん、あいうえお
かきのみ、くりのみ、かきくけこ

ささのはさらさら、さしすせそ
たいこたたいて、たちつと
なかよくならんで、なにぬねの
はちさんはたらき、はひふへほ …」

ひたすら日本語の語感と滑舌のトレーニングが続きました。学生の中からは「早く次のことを勉強しましょう。」という声も上がりましたが、どの先生も「これが外大の伝統的な勉強法です！」というだけでした。私たちがその大切さが理解できたのは、かなり後のこと。当時の学生にとっては、意味も分からないまま、とにかく大声でひたすら繰り返す練習は、忍耐力が必要な、本当に疲れる練習でした。

自分の耳で自分の発音をチェックする。

そのとき同時に行う大切な練習が、テープに自分の発音を入れてお手本と比べ、自ら違いを発見することです。正しく発音できるまで、自分の問題点を探して何度も聴き比べて修正する。この繰り返しの中で、まず聴きとる力、耳の正しい判断力が培われていきます。すると耳の正しい判断力が、やがて正しい発音につながっていく…という外国語の効果的な学習の流れが生まれます。これは音楽の学習と共通するところがあります。

私の小学校の音楽の授業では、先生は歌を教える前に、いつもオルガンで音階そのものを繰り返し子供たちに聴かせて、音符と音階の関係を耳から徹底的に覚えさせました。もちろん耳から口への練習も欠かせません。例えば先生がオルガンで「ドミソレファラ」と弾いたら、生徒たちは一斉に「ドミソレファラ」と歌います。歌詞をつけて歌う前に、まず音階をしっかり覚えさせます。これを繰り返して行くと、子供たちには音を聴いて音階で表現することも、逆に音符から旋律をイメージして歌うことも、そんなに難しいことではなくなります。

日本に来て意外だったことの一つがこのことでした。例えば童謡の「春が来た」は殆どの日本人が歌うことができますが、これを「ソ〜ミファソ〜ラ…」と音階に置き換えられる人が少ないことは、私にとって未だにナゾです。日本人は小さい時から学校でタテ笛などの楽器を習いますし、ピアノを習う人も少なくないのに、聴いた音を音符にしたり、音符から旋律をイメージして歌える人が、意外に少ないことはちょっと驚きでした。音階を正しくキャッチできれば、正しく発音することも出来ますし、旋律を聴いて音符にするのもそんなに難しくありません。

語学と音楽には共通点があります。かつて私は中国で、外国からの留学生に中国語を教えたことがあります。留学生には漢字を全く知らない英語圏からの学生と、漢字に馴染みのある日本からの学生がいました。英語圏からの学生は、漢字に馴染みがないこともあって、ひたすら耳から中国語を聴き、聴いた中国語の音を口で真似て中国語を覚えようとします。一方日本人の学生は、見覚え

のある漢字をじっと見つめて、意味を理解しようとしています。いくつものクラスで留学生を教えました。共通するのは英語圏の学生は会話の上達が早く、日本人の学生は読解力の向上が早いことでした。同じ外国語の学習でも、違うアプローチは違う成果につながります。

日本人に外国語を聴くこと、話すことが苦手、わからないという人が少なくないのは、こうした耳から口につなげる練習、あるいは自分の発音を耳で確かめるといった、耳と口を相互に使う学習を重視する取り組みが、十分に行われてこなかったことにも、原因があるような気がします。

母国語の発音で外国語を学ぶのはムリ！

母国語の表記で外国語の発音を表記するのは、一見てっとり早い便利な方法に見えますが、やはり無理のある間違った勉強法です。何故なら外国語の中には母国語にはない発音があることが多いので、それを母国語で表記することには無理があるからです。たまには、耳から聴いた音をもとにした「ホツタイモイジルナ？ (What time is it now?)」のような、外国語に近い発音を表記できる場合もあるかもしれません。でも普通は「ホワット+タイム+イズ+イット+ナウ」というように単語を組み合わせた文、さらに複数の文が組み合わさった文章となると、よほど運が良くない限り、母国語で表記された発音は、その言語のネイティブスピーカーにとって意味不明の宇宙言語となってしまいます。

海外旅行者向けのパンフレットなどには、現地のことばにカタカナ表記の発音が添えられていることがよくあります。どうしても通じなければ、そのままパンフレットを見せて「指さし会話」で、通じさせる方法もありますが、あくまでも臨時の応急措置です。

中国でも母国語で簡便に外国語の発音を表記するという方法は、昔からありました。満洲国時代、中国の東北地方の人たちは、日本語の「車」を「轆轤馬 (中国語の音声記号では *guluma*)」と、「一番」を「一級棒 (*yijibang*)」と、「餅」を「饅吉 (*moji*)」…と中国語で表記し発音していました。同じように満洲国にいた日本人は、中国語で年寄りの男性を意味する「老頭兒 (*laotour*)」を「ロートル」と、ゆっくりを意味する「慢慢地 (*manmande*)」を「マンマンデー」、子供を意味する「小孩 (*xiaohai*)」を「ショウハイ」、肉体労働を意味する「苦力 (*kuli*)」を「クーリー」…と日本語で発音していました。正式な語学教育を受けていない人が自分なりに外国語を理解しようとするには簡便ですし、仕方がないことと思いますが、こうした方法には限界もあります。不思議なのは、グローバル化の進む二十一世紀の日本にあって、外国語を勉強しようとする人のための教科書や参考書の中にも、いまだにカタカナで外国語の発音を教えようとする書物があり、学ぶ側にもカタカナで発音を学ぶのが普通だと考える人がいることです。

私の中学時代、クラスに英語の教科書に漢字で書き込み、発音を覚えているクラスメートがいました。彼の教科書には「struggle」の横に「死猪拉狗 (*sizhulagou*: 死んだ豚が犬を引っ張る)」、 「tomorrow」の横には「吐猫肉 (*tumaorou*: 猫の肉を吐く)」、 「bus」には「爸死 (*basi*: 父が死

ぬ)」という意味不明の中国語が書き込んでありました。朗読の時、その生徒の発音がおかしいと感じた先生は、彼の教科書のこの書き込みを発見しました。「英語の単語の発音は国際音声記号で覚えなさい！それが一番の近道、確実な方法だ！そんな中国語式の英語が通用するはずがない！」と普段温厚な年配の先生が、珍しく怒りました。

母国語で外国語の音の表記をすることの問題は、例えばその発音を日本語で「リバー」と書いてしまうと、それが「river」の音なのか「liver」の音なのか分からなくなってしまうこと。つまり一旦こうした簡便な表記がなされると、正しい原語の音、国際音声記号での表現、発音に戻すことができなくなってしまい、正しい発音が分からなくなってしまうという点です。てっとり早く、母国語を土台に外国語を勉強したくなる気持ちは理解できます。しかし母国語で外国語の発音を学ぼうとすると、結果的に通じない外国語になってしまうというのは、外国語学習に共通する問題点です。

知っている単語が少ない段階はルー語を使おう！

外国語を学び始めた最初の頃は、どうしても単語の量が足りません。単語量を蓄積するための努力が必要となりますが、まずは覚えたばかりの単語を使うことが大切です。つまり覚えた単語を知識としてではなく、使える言葉に変える。日常の会話の中でその覚えた単語を活用しないと、せっかく覚えた単語も辞書や先生のところへ戻って行ってしまいます。そこで母国語に外国語の単語を混ぜて使ってみます。学習が進んで単語量が増えてくれば、今度は逆に外国語をベースにして、足りないところだけ母国語の単語を混ぜて話す。こうした練習を続けていくうちに単語量が増えていき、やがて外国語だけで表現できるようになって行きます。私の外大時代、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、日本語、タイ語、ベトナム語…どの学部もこの方法で外国語を学んで行きました。テレビでおなじみの日英ごちゃまぜのルー語も、学び始めの語学の学習方法としては、なかなか理に適っているのです。

もう一つ、聴く、話す能力を高める方法に、子供と遊ぶという方法があります。大人が相手だと、うまく理解できない時は、相手がそれに応じて言い換えたり、話すスピードを落としたり配慮してくれます。しかし子供は単語の範囲に限られている半面、そうした配慮はしてくれません。子供はストレートに自分の言いたいことを言うのが特徴です。子供と自由に話せるようになれば、むしろ大人との普通の会話は楽にできるようになります。

さらに上級になれば、テーマを決めて外国語で議論、討論することが有効な学習法になります。議論の流れ、スピードに沿って、相手の言葉からその意味を理解し、自分の意見を投げ返す…テープなら分からない部分を聴き返すことができますし、映画なら言葉以外の映像などからも意味を理解することが可能です。しかし議論ではそうはいきません。その場で聴き取って理解する、意見を表現する…そうした外国語の総合的なトレーニングには議論が最適です。

学習の機会、環境を進んでつくる。

外国語を使う環境が少ない国内で外国語を学ぶには、やはりそれなりの努力が必要です。私の学生時代、外大には外国からの先生は少なくありませんでした。それでも外国人の先生の授業、コミュニケーションの時間には限りがあるので、テープ、ラジオ、テレビ、ビデオ、歌、映画、スピーチ大会、そして日常生活のあらゆる機会をとらえて、学生同士あるいは先生と一緒に、自ら外国語を習得する機会、環境をつくることを厳しく求められました。また先生たちもできる限りそれに協力してくれました。日本語科の先生が普段から学生と日本語で接するのはもちろんですが、先輩と後輩、同級生同士でも日本語で話をするのを習慣づける。こうすることで、自然と日頃から日本語を使う環境が生まれます。環境というと視聴覚の立派な設備や、外国人がたくさんいる環境を思い浮かべるかもしれませんが。しかし実際は一緒に勉強をする仲間さえいれば、どこでもそうした環境を作ることができます。まず必要なのは意識の改革かもしれません。細かな文法や用法を正すのは、知識を増やしながらかでも大丈夫。何より日常の中でどんどんその外国語を使うこと、そうした生の環境づくりがとても大事です。中国でも「外大は別世界」とよく言われますが、それは特別な施設があるからでも、外国人がとびきりキャンパスに沢山いるからでもありません。ただ違うのは、どの外国語を専攻する学生たちも、とにかく皆が日常的に専攻する外国語を使って話をしているので、キャンパスの中は一日中いろいろな外国語で溢れかえっています。

もちろん勉強を始めたばかりの人が上手に話せるはずはありません。外国語の勉強には大らかさも大切です。「下手だから」とか「恥ずかしいから」と、上手になってから話そうと思ったら、ずっと下手なままです。少々下手でも、間違いがあってもどんどん繰り返して使っていく。むしろその中で気づいた間違いは大きな財産となります。得意だから、上手だから使うものではありません。とにかくその外国語を使ってみる。それが中国の外大流の外国語の習得方法です。

やはり外国語のマスターは、一朝一夕に実現できるものではありません。外国語を学ぶには時間もかかりますし、持続力が必要です。一九八〇年代、日本との経済交流に注目が集まる中で、中国に日本語の学習ブームが起きました。そんな中で、社会人向きに「一燈油日語（石油の豆ランプが燃え尽きる間の一晩、つまり短時間で日本語をマスターできる!）」という語学講座が登場しました。「一晩で覚えられる!」真面目に日本語を学んでいる人たちは、ただ笑うだけでした。案の定、最初は「世界一難しい日本語を一晩でマスターできる!」と人気を集めました。結局「何遍繰り返して勉強しても分からない!」という評判を残し、市場から消えて行きました。やはり外国語の学習も、「努力せずに、簡単に…」というのはあり得ません。自ら進んで行う一步一步の努力の積み重ねから、楽しみも一つ一つ増えていく、そして成果も一つ一つ上がっていくのです。